

音順	方劑名 傷寒論・金匱要略条文	生薬構成 および製法・服用方法
りー1	<p><b>理中丸</b> <b>理中湯</b> (<b>人参湯</b>)</p>	<p>読み および解説・その他</p> <p><b>人参</b> (甘微寒)・<b>甘草</b> (甘平)・<b>白朮</b> (苦温)・<b>乾姜</b> (辛温) 各3g</p> <p>上の4味を杵いて篩い粉末とし、蜜とよく混和して鶏卵の黄味位の大きさにして、沸湯数勺の中に1丸を入れてとく、砕いて温かい中に服用する。昼間に3回、夜2回</p> <p>服用して腹中が温まらないものは3、4丸を余分に服用させる。しかし効果は湯薬には及ばない。</p> <p>湯薬の煎じる方法は4味を3gずつ取り、水320mlを以って煮て120mlに煮詰め、滓を去り、1日3回に分けて温服する。</p>
<p>弁霍乱病脈証併治第十三第6条 (傷寒論)</p>		
<p>「<b>霍乱</b>頭痛、発熱、身疼痛、熱多く、水を飲まんと欲する者は<b>五苓散</b>之を主<sup>つかさど</sup>る。寒多く、水を用いざる者は、<b>理中丸</b>之を主<sup>つかさど</sup>る。」</p>		
<p>解説 霍乱で、頭痛して、熱を發し、身体がうずき痛み、熱の症状が多くて水を飲みたがる者には、<b>五苓散</b>が主治する。寒の症状が多くて水を飲みたがらぬのは、<b>理中丸</b>が主治する。</p>		
<p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>		
<p>「熱多く」は、胃に熱がこもって起こる症状で、「寒多く」は、中焦の内寒による症状である。</p>		
<p><b>五苓散</b>は、<b>桂枝</b>・<b>白朮</b>で外を暖め、<b>沢瀉</b>で内熱を去る。</p>		
<p><b>人参湯</b> (<b>理中湯</b>) は、<b>白朮</b>で外を温め、<b>人参</b>で裏の虚熱を鎮め、<b>乾姜</b>で内寒を除く。</p>		
<p><b>五苓散</b>証の場合は</p>		
<p>太陽病表証が解除しなかったり、或いは発汗法を行っても方法が妥当でなかったりすると、太陽経の熱邪が、経脈を伝わって裏の膀胱に入り、膀胱の気化作用が障害され、水は下焦に蓄まり小便不利となり、下腹部が膨満する(少腹満)。また津液が体を循らなくなるので水が上に昇らず、煩渴して、水を飲みたがり飲んでも渴は癒やされず、飲んだ水は、吸収されず上逆して、飲めば即座に嘔くという水逆の証となる。この場合、ゲゲエ言わずにすんなり嘔吐する。また表証も残っているので、脈浮、または脈数で、少し表熱もある。また下焦が水浸しになるので下痢する。下痢は水様便で腹痛はない。この様に、太陽経の熱邪と水が、下焦で結合したものを太陽蓄水証といい、<b>五苓散</b>が主治する。また膀胱湿熱を伴った場合は、<b>猪苓湯</b>を用いる。</p>		
<p><b>理中丸</b> (<b>人参湯</b>) 証の場合は</p>		
<p>脾胃虚寒があり、脾胃の陽気不足による運化障害のために寒湿困脾となり、口渴は無く、水湿が滞って胃寒(胃部が張って、冷えて痛む)がある場合は、<b>平胃散</b>を用いる。更に、寒が多い太陰病脾虚寒では、寒湿が生じ易く、下焦が水びたしとなり、霍乱(下痢が生じ、寒湿が上逆して嘔吐し、悪心も伴う)が生じる。口渴は無く、寒湿のために嘔吐し、下痢は無いが、非常に軽い。胃虚寒が主な場合は、<b>呉茱萸湯</b>を用いるが、冷えると腹痛、下痢を起こし易く、胃が痞えた感じがして、少食、また胸の中も痞えて、身体がだるく元気がないなどを伴う場合は、<b>理中湯</b> (<b>人参湯</b>) を用い、更に表証を伴う場合は、<b>桂枝人参湯</b>を用い、寒が多く症状が激しい場合には、<b>附子理中湯</b>を用いるとよい。</p>		
<p><b>理中丸</b>加減方</p>		
<p>臍の上が脈を打つものは、腎気の異常による動悸である。<b>理中丸</b> 一<b>白朮</b> +<b>桂枝</b> 4gとする。</p>		
<p>吐くことが多いものには <b>理中丸</b> 一<b>白朮</b> +<b>生姜</b> 3gとする。</p>		
<p>動悸がするものには <b>理中丸</b> +<b>茯苓</b> 2gとする。</p>		
<p>咽が渇いて、水を欲しがるものは <b>理中丸</b> +<b>白朮</b>を加え全量を4.5gとする。</p>		
<p>腹中痛むものは <b>理中丸</b> +<b>人参</b>を加え全量を4.5gとする。</p>		
<p>腹中の冷えるものは <b>理中丸</b> +<b>乾姜</b>を加え全量を4.5gとする。</p>		
<p>腹満するものは <b>理中丸</b> 一<b>白朮</b> +<b>炮附子</b> 0.2gとする。</p>		
<p>湯を服用して後20~30分してから、温かい粥を茶碗に一杯位飲んで身体を温める。衣服をはいではならない。</p>		
<p>参考 霍乱は、下痢、嘔吐の激しい病で、霍乱には、表証と、裏証の2種類があり、表証で熱が多い<b>五苓散</b>証と、裏証で寒の多い<b>理中丸</b> (<b>人参湯</b>) 証の他に、少陰病の<b>四逆湯</b>証・<b>四逆加人参湯</b>証・<b>通脈四逆湯</b>証でも見られる。</p>		
<p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>		
<p>三焦は、水穀の道路をいい、邪が上焦にあれば嘔吐して利せず、邪が下焦にあれば利して嘔せず、邪が中焦にあれば吐して利すのであり、飲食を欲せず、寒熱を調節出来ずして霍乱を起こすと考えられる。とすれば、<b>五苓散</b>と<b>理中丸</b>との違いは、嘔と下痢に対して、胃の虚熱を取り、津液の循環をよくして邪を散ずるのが、<b>五苓散</b>で、<b>理中丸</b>は、胃を温めて津液の循環をよくして、温めて治するということになる。</p>		
<p><b>理中丸</b> (<b>人参湯</b>) 証</p>		
<p>新古方薬囊によれば「裏に寒があつて、胸中が痞える者、胸中に痛みのある者、唾多く出でて止まらない者、腹中痛んで、手足冷え下痢し易き者、胃中塞がりたる感ありてムカムカし易い者に用いる。」と記されている。</p>		
<p>弁陰陽易瘥後勞復病脈証併治第十四第5条 (傷寒論)</p>		
<p>「大病瘥後喜唾、久しく<sup>い</sup>了<sup>きだ</sup>了<sup>りょうりょう</sup>たらざる者は胃上に寒有り。当<sup>まさ</sup>に丸薬を以て之を温むべし。<b>理中丸</b>に宜し。」</p>		
<p>解説 大病が治った後で、身体が十分に回復せずに、唾が多く、しばらく気分がはっきりしないものは、胃の上に寒による障害があるもので、当然丸薬でこれを温むべきである。それには<b>理中丸</b>がよい。</p>		
<p>大病が治った後で、身体が十分に回復せずに脾胃虚寒が残り、脾の運化障害のために水湿が滞って寒湿困脾となる。また胃の陽気が不足しているために、胃部が張って、冷えて痛む胃虚寒になると、滞っている水湿が、口に溢れて、唾液がただらと絶えず出て、口に粘り着き、気分がはっきりしないものは、<b>理中丸</b>を服用して脾胃を温めるとよい。</p>		
<p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>		
<p>大病の後は、血気が虚して寒を生じ易い。風に当たって皮膚を冷やしたり、陽気を虚させたり、冷たいものを服んだりすると、その寒が身体にうんと影響を及ぼすと同時に、胃の虚冷によって水を散ずる力が減じて、その水が上に湧出して、喜唾をなすのであるから、<b>人参湯</b>で胃の冷えを治すればよいのである。</p>		
<p><b>人参湯</b>は、中焦を温め、よって体液を全身にめぐらす薬方である。</p>		
<p>参考 胃寒で、嘔吐、頭痛がある場合には、<b>呉茱萸湯</b>を用いるとよい。</p> <p>裏虚寒による慢性の下痢があり、頭痛があつたり、また表証(頭痛、悪寒、発熱)があつて、裏虚寒の証を伴う時には、<b>桂枝人参湯</b>を用いるとよい。</p>		